

横浜市立末吉小学校

令和4年度 学力向上アクションプラン

1 中期学校経営方針

(1) 学校経営中期取組目標

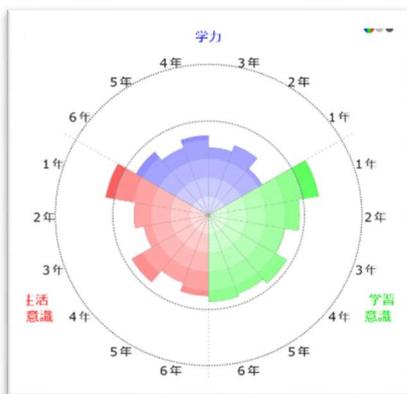
学校経営中期取組目標	
◎つながりを大切にし、子ども一人ひとりが主役の魅力ある学校にします。	
○個別最適な学びと共同的な学びの一体化を進め、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて学習の楽しさを実感できる授業づくりを推進し、学力の向上を図ります。	
○誰もが安全・安心で楽しく学校生活がおくれるように心の居場所づくりと主体性の育成に努めます。	
○たてわり活動を充実させるとともに、「まち」や「人」とのつながりを大切にし教育活動の充実を図ります。	

(2) 学力向上に向けた重点取組分野・取組目標・具体的取組

重点取組分野	取組目標	具体的取組
生きてはたらく知	子どもが分かる喜びを実感できるように、授業改善を図る。	①校内重点研を中心に、「主体的・対話的な深い学び」の視点に立った授業改善を図り、子どもが分かる喜びを実感できるようにする。 ②学力・学習状況調査の分析などをもとにして、子どもの理解状況や課題を的確に把握し、それに合わせて基礎・基本の確実な定着を図る。
担当	重点研推進委員会 各教科研究部会	

2 横浜市学力学習状況調査等からの実態把握

(1) 学力の概要と要因の分析



全体的に見て、3つのどの観点においても、横浜市の市平均を下回っていることが分かる。学力の観点においては、どの学年も市平均を下回っており、個に応じた指導を行い、基礎的・基本的な学力を定着させる必要がある。学習意識においても市平均を下回る学年がほとんどである。身近な生活と結びつけた学習を大切にし、子どもたちが「分かる」「楽しい」と感じられるような授業づくりが必要である。また、生活意識においても、市平均を下回る学年がほとんどである。家庭との連携を大切に、学習習慣の定着を図っていくようにしたい。

(2) 教科学習の状況

- 国語科：学習意欲は市平均と差はないが、学力C・D層が半分を上回り、市平均と大きな差がある。
- 算数科：市平均と比較し、学力層Aが12%低く、学力層Dが9%高く、学力の二極化が見られる。
- 社会科：学力層Dが約3割を占め、学力層C・Dを合わせると約6割を占める。
- 理科：学力層C・Dを合わせて6割を超え、市平均と大きな差が見られる。

(3) 経年変化の状況と要因の分析（学習・生活意識調査も含めて分析）

「勉強が好きだ」「学校の授業は、分かりやすい」という児童の割合は市平均と変わらない。生活意識調査の結果から、朝食を毎日食べる児童の割合が市平均より7%低かったり、テレビを一日2時間以上見る児童の割合が6%多かったりすることが分かった。しっかりと睡眠をとり、朝食を食べ、学校の授業に集中して取り組める環境づくりが必要である。そして、教職員は、学ぶ楽しさを実感できるような授業改善を通して、学力層の底上げを図っていく必要がある。

3 令和4年度 学年・教科等としての具体的取組

1 学年

- 国語科では、日常生活で気づいたことや楽しかったことなどについて言葉や文字、動作、劇化などで表現する活動を充実させることにより、伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。
- 算数科では、体験的な活動を通して、基礎基本の確実な定着を図る。
- 生活科では、身近な人や社会と積極的に関わり、対象のよさを実感することによって、自分を認め合い、協働、共生できるようにする。

2 学年

- 国語科では、基礎基本の確実な定着を大切にするとともに、相手意識や見通しをもって学習を進められるようにする。自分の思いや考えを書いたり、順序立てて話したりすることを通して、学ぶことや友達とのかかわりを楽しみながら学ぶ姿をめざす。
- 算数科では、既習事項を活用したり、体験的な活動を通したりして、基礎基本の定着を図る。
- 生活科では、身近な人・もの・自然・季節に関心をもち、様々な人々と関わることにより、対象についての気づきや考えをもち、伝えることができるようにする。

3 学年

- 国語科では、相手意識・目的意識を明確にした言語活動を行うことにより、学習に対する切実感をもたせ、学習への関心・意欲を高められるようにする。書くことでは、伝えたい内容にふさわしい言葉を用いて書いたり、書いたものを読みあい、良いところを伝え合ったりする活動を通して指導していく。
- 算数科では、基礎基本の定着や既習事項を活用して課題に取り組めるように、活動の充実や工夫を行っていく。

4 学年

- 国語科では、自分の考えを深め、相手に伝えたいという意欲につなげられるように、相手意識・目的意識を明確にした言語活動を行うようにする。語彙を増やし、自分の言葉で伝えることができるようにする。
- 算数科では、繰り返し演習を行い基礎基本の定着をはかる。児童が自分ごととして捉えられるように単元を工夫する。
- 教科横断的な学びを意識して、学習したことを様々な場で生かすことができるようにする。

5 学年

- 国語科では、教師が児童に身に付けさせたい力を明確にして授業を行い、児童自身がどんな力が身に付いたかを振り返られるようにする。一人ひとりが自分の考えをもったうえで、友達の考えに触れる場を設け、自分の考えに生かすことができるようにする。
- 算数科では、子どもの理解状況や課題を的確に把握し、基礎・基本の確実な定着を図るようにする。

6 学年

- 国語科では、「何を」「どのように」表現すればよいかを明確にした言語活動を通して、一人ひとりが確実に自分の考えを表現できるようにする。また、友達の表現にふれる場を設定することを通して、理解を深めたり、自分の表現に生かしたりすることができるようにする。
- 算数科では、基礎基本が確実に定着できるようにする。そうすることで、分かる喜びや学ぶ楽しさを実感できるようにする。

個別支援学級

- 国語科では、コミュニケーション能力を重視して、友達や先生と実際に話をしたり聞いたりすることを通して、日常生活に必要な言葉を身につけられるようにする。また積極的に自分の考えを表現しようとする気持ちを育て、伝え合う力を養い、生活の中でその力を活用できるようにする。
- 生活単元学習では、実際の生活から発展させ、子どもの興味・関心に応じた活動を計画することで目的意識を育て、集団での活動に対して主体的に共同して取り組むことができるようにする。